

| Title | 前漢における予言・「謡」の諸相 : 中国政治思想の 深層 |
|--------------|---------------------------------|
| Author(s) | 串田, 久治 |
| Citation | 中国研究集刊. 1991, 10, p. 21-40 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/61187 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

前漢における予言・「謠」の諸相

串田久治

はじめに

雕龍』雑文第十四)。

・ 古酷な政治への恨みや厳しい生活の悲しみを歌う詩は、たと 古酷な政治への恨みや厳しい生活の悲しみを切々と謳えば『詩經』の中に散見する。また、苦しみ悲しみを切々と謳 というが世界中に存在することは誰もが知っている。しかし、中 ち歌が世界中に存在することは誰もが知っている。しかし、中 ち歌が世界中に存在することは誰もが知っている。しかし、中 ち歌が世界中に存在することは誰もが知っている。しかし、中 ち歌が世界中に存在することは誰もが知っている。

「心の憂うる、我れ歌い且つ謠う」の一句に、「我が心 君のと言うように、伴奏のない歌を意味していた。しかし、鄭玄がは、絲竹の類無くして獨だ之れを歌うを謂う」(『爾雅義疏』)は、絲竹の類無くして獨だ之れを歌と曰い、徒だ歌うを謠と曰う」(『詩經』魏風、「鬒有桃」の毛傳)とあり、郝懿行が「謠と(『詩經》親風、「鬒有桃」の毛傳)とあり、《『説文解字』)、雅』釋樂第七)、「詹とは徒だ歌うなり」(『副文解字』)、雅』釋樂第七)、「詹とは徒だ歌う、之れを謠と謂う」(『爾そもそも「謠」とは、「徒だ歌う、之れを謠と謂う」(『爾

などがあげられよう。言うまでもなく、言葉遊びは古代漢語や発させること、言葉遊びによって内容に広がりをもたせることたちの怒りや苦しみを、責任の所在不明の形で謳って不満を爆たちの怒りや苦しみを、責任の所在不明の形で謳って不満を爆たちの怒りや苦しみを、責任の所在不明の形で謳って不満を爆なに区別しない。と言うのは両者にいくつかの共通点が見られ密に区別しない。と言うのは両者にいくつかの共通点が見られ

に役立てている(『漢書』韓延壽傳)。

それらが「予言」するものを分析し、「謠」が果した社会的な らいは、これまであまり論ぜられることのなかった「歌」と た古代中国人の弱者の知恵を垣間見ることができる。本稿のね を理解すれば、そこには社会や為政者を批判することが難しかっ 付与されていることも共通するところである。「予言」の内容 者にはすぐにそれと解る謎がある。更にその多くは「予言」が これが「歌」であり「謠」である。更にその遊びは漢字の字面 状況は変わらないにもかかわらず、決して遊び心を失わない。 にもかかわらず、また、自分達のおかれた立場が弱く悲観的な 判となる。恨み悲しみは憎しみとなり、一向に希望が見えない 現代漢語の専売特許ではない。あるいは世界のあらゆる言語に に現れる(注二)とは限らず、時には複雑難解な遊びがある。 に遊びではなく、政治への不満の爆発となり社会への痛烈な批 あるのかもしれない(注一)。しかし、ここでは言葉遊びは単 「謠」(注三)のいくつかを取り上げて、そこに隠された意味、 一見一聞しただけではわからないが、悲しみ苦しみを共有する

一、呂后をめぐって

役割を前漢一代において考察することにある。

泗侯に封じ、その後、二人の兄、呂澤と呂釋をそれぞれ周呂侯・「高祖、天下を定むるを佐け」たという理由で、その父親を臨高祖劉邦の皇后呂氏。彼女は劉邦が漢王となったその年に、

て、劉氏以外の呂氏の諸侯王を誕生させた。の禄を趙王と四人を王とし、また、都合六人の身内を列侯とし呂王、台の弟の産を梁王、台の子の通を燕王、建成侯呂釋の子呂王、台の弟の産を梁王、台の子の通を燕王、建成侯呂釋の子の呂台を建成侯に封じて、皇后の時にすでに三人の呂氏の諸侯を出した。

「人と爲り剛毅」な呂后は、劉邦が漢王となった後に寵愛して君臨した彼女は、ここに復讐劇を開始する。 して君臨した彼女は、ここに復讐劇を開始する。

歌ったが、趙王に助けを求めていることを知った呂太后は、まい離るること三千里。當に誰に使いして女に告げしむべし」と爲り、母は虜爲り。終日春きて薄暮なり。常に死と伍爲り。相だり、母は虜爲り。終日春きて薄暮なり。常に死と伍爲り。相と子如意に向けられる。呂太后は戚夫人を幽閉し、頭髪を剃っ人と子如意に向けられる。呂太后は戚夫人を幽閉し、頭髪を剃っ人と子如意に向けられる。呂太后は戚夫人を幽閉し、頭髪を剃っ人と子如意に向けられる。呂太后は戚夫人を幽閉し、頭髪を剃っ

では超王の殺害を決意する。それとなく祭知した「慈仁」なるでは、 「なる」となった。 では、「起居飲食を與にし」で守ったが、寝坊した趙王は境毒恵帝は「起居飲食を與にし」で守ったが、寝坊した趙王は境毒恵帝は「起居飲食を與にし」で守ったが、寝坊した趙王は境毒恵帝は「起居飲食を與にし」であることを教えるという、を息子の恵帝に見せ、それが戚夫人であることを教えるという、を息子の恵帝に見せ、それが戚夫人であることを教えるという、を息子の恵帝に見せ、それが戚夫人であることを教えるという、と、とまでも残虐なことをやってのけたのである。これはお前のためにしたことだ、呂太后は恵帝にそう言おうとしたのかもしためにしたことだ、呂太后は恵帝にそう言おうとしたのかもしためにしたことだ、呂太后は恵帝にそう言おうとしたのかもしたのだいが、もともと「仁弱」かつ「慈仁」の恵帝は「大いに哭き、因りて病み、歳餘も起つこと能わず」と宣告した。それからというに復た天下を治むること能わず」と宣告した。それからというに対した。

ず、ついに幽死させた。そして、次に恒山王弘を帝に立て、呂ず、ついに幽死させた。そして、次に恒山王弘を帝に立て、呂は、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そは、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そは、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そは、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そば、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そば、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そば、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そば、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、そば、子供の生まれない恵帝の任力って政を執った呂太后酒に溺れ廃人同様になった恵帝に代わって政を執った呂太后酒に溺れた人の様になった恵帝に代わって政を執った呂太后

この呂太后が、亡くなる前年に宴会を開いた。太后自身が我らんと欲すること甚し」く、呂氏一族の安泰を図った。しかし、「呂太后崩ずるや、大臣 之れを正し、卒に呂氏を滅ぼし」、「分部して悉く諸呂の男女を捕え、少長と無く皆な之れを斬る」、「兄太后崩ずるや、大臣 之れを正し、卒に呂氏を滅ぼし」、「兄太一族は皆殺しとなったからである。

いたいと申し出た。 娘を妻わせた)は、酒宴酣にして太后に「耕田」の心がけを謳娘を妻わせた)は、酒宴酣にして太后に「耕田」の心がけを謳生まれた斉悼恵王の子供。太后はかれを朱虚侯に封じ、呂禄のが子のようにかわいがった朱虚侯劉章(高祖と曹夫人との間に

よハ)。苗を立てるには疏ならんと欲す(苗はまばらに植えるのが深く耕して概く種まき(よく耕して密に種をまき)、

銀きて之れを去れ(根こそぎ鋤で取り去れ)。其の種に非ざる者は(そしてその種でないものは)、

る者は、鉏きて之れを去れ」とは、劉氏以外の者(呂氏一族)令して藩輔と爲す」ことであり(顔師古注)、「其の種に非ざ疏ならんと欲す」とは「之れ(劉氏の子孫)を四散して置き、概く種まき」とは「多く子孫を生む」こと、「苗を立てるにはこれを聞いた呂太后は「黙然たり」。なぜなら、「深く耕して

世家、『漢書』高后紀・高五王傳・外戚傳)。とうもあろうに宴席で罵倒されたのである(『史記』齊悼惠王とく畜」って呂氏一族の仲間入りを許したつもりの劉章に、とを抹殺せよと言うにほかならないからである。自ら「兒子のご

「黙然」としている太后に権勢の翳りが見て取れる。 このように言えば、劉章は命懸けの一か八かの大勝負をした このようであるが、かれとてそれほどの危険は冒さない。そのかのようであるが、かれとてそれほどの危険は冒さない。そのかのようであるが、かれとてそれほどの危険は冒さない。そのかのようであるが、かれとてそれほどの危険は冒さない。そのかのようであるが、かれとてそれほどの危険は冒さない。そのかのようであるが、「黙然たり」と圧倒されるだけ。戚夫人をとできる。しかし、ここで呂太后は劉章のこの歌の意味を追をです」と。しかし、ここで呂太后は劉章のこの歌の意味を追及するどころか、「黙然たり」と圧倒されるだけ。戚夫人を「大統」としている太后に権勢の翳りが見て取れる。

たすぐ後に、次のような劉向の解説を載せる。月乙亥、未央宮の凌室に災あり。丙子、織室に災あり」と記し早くも予言的に現れていたのである。『漢書』は「惠帝四年十で、太后が政治の実権を握っていた)に起きた未央宮の火災に、

ところがこの翳り、恵帝の四年(この時すでに恵帝は酒浸り

元年、呂太后 趙王如意を殺し、其の母戚夫人を残戮す。

ところで、趙王如意・戚夫人の殺戮を皮切りに、呂太后は次々

く、「皇后 宗廟を奉ずるの徳亡く、將に祭祀を絶たんと以にして、『春秋』の御廩と同義なり。天 戒めて若く曰以にして、『春秋』の御廩と同義なり。明日、織室に災あり。后と爲す。其の乙亥、凌室に災あり。明日、織室に災あり。是の歳、十月壬寅、太后 帝の姊魯元公主の女を立てて皇

す」と。

恵帝四年、十月乙亥、未央宮の凌室に火災が発生し、翌日も織恵帝四年、十月乙亥、未央宮の凌室に火災が発生し、宏日の門に出すると言うのである。すなわち、恵帝四年の二つの火災は「帝の婦魯元公主の女」、すなわち、恵帝四年の二つの火災は「帝の婦魯元公主の女」、すなわち呂太后の実の娘の子張氏は「帝の婦魯元公主の女」、すなわち呂太后の実の娘の子張氏は「帝の婦魯元公主の女」、すなわち呂太后の実の娘の子張氏は「帝の婦魯元公主の女」、すなわち呂太后の実の娘の子張氏は図れない。否、彼女はそれでも安心できなかった。二人の間に跡継ぎを作らねばならない。だが、「將に祭祀を絶たんとす」は現実となり、彼女の思いは裏切られた。しかたなく後宮の子を、まるで二人の間に生まれた子であるかのように仕立てたのである。それが、「太后 安くんぞ能く吾が母を殺して我れを名づけん。我れ壯たりて即ち爲す所を爲さん」と反逆し、太后と幽閉されて死んでいった少帝恭である。

制の七年、太后の死ぬ前年のことであった。制の七年、太后の死ぬ前年のことであった。しかし、かれは他の女性を愛して妃を相手にしない。怒った。しかし、かれは他の女性を愛して妃を相手にしない。怒ったがは太后に讒言した。趙王が「呂氏 安んぞ王たるを得ん。た太后は趙王を呼び付け、見張りをつけて食事も与えず放置した太后は趙王を呼び付け、見張りをつけて食事も与えず放置した。側の七年、太后の死ぬ前年のことであった。

王侯を迫脅し、彊いて我れに妃を授く。
王侯を迫脅し、彊いて我れに妃を授く。
我が妃 既に妒み、我れを誣うるに惡を以てす。
豫女 國を亂すも、上 曾て寤らず。
豫本 國を亂すも、上 曾て寤らず。
北に忠臣無きも、何故に國を棄てん。
北に忠臣無きも、何故に國を棄てん。
北に忠臣無きも、何故に國を棄てん。
北に忠臣無きも、何故に國を棄てん。
北に記述された。
北に記述された。
北の本とに、
北の本とに、
はの本とに、
はいるに、
はい

呂太后への復讐の誓いである。しかし、呂氏一族の最後を先取ものは何か。「天に託して仇を報いん」とは、予言というより太后に恨みを抱いたまま幽死した趙王のこの歌が「予言」する太后に恨みを抱いたまま幽死した趙王のこの歌が「予言」する呂氏 理を絶ち、天に託して仇を報いん(『漢書』高五王呂氏 理を絶ち、天に託して仇を報いん(『漢書』高五王

える。りして言うなら、これほど明快に「予言」した歌も珍しいと言

ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「(高后元年)

ず」、呂太后には無視できなかった。そして側近の者たちにもず」、呂太后には無視できなかった。そして側近の者たちにもを以て之れを長安の民の家次に葬る」、民の葬礼だけでなく墓をし、晝も晦し」、日食が現れたのである。日食であれば昼な所も一般人の所と、戚夫人や如意の時と同様、最後の最後まで所も一般人の所と、戚夫人や如意の時と同様、最後の最後まで育し、晝も晦し」、日食が現れたのである。日食であれば昼な所も一般人の所と、戚夫人や如意の時と同様、最後の最後まで育し、豊いなかった。そして側近の者たちにもず」、呂太后には無視できなかった。そして側近の者たちにもず」、呂太后には無視できなかった。そして側近の者たちにもないてきながった。

二、淮南厲王の民歌について

となった。
こうか。果してこの不吉な兆候は「明年、應ず」、翌八年、現実がか。果してこの不吉な兆候は「明年、應ず」、翌八年、現実がか。果してこの不吉な兆候は「明年、應ず」、翌八年、現実があるいは呂太后自身がすでに弱気になりかけていたからであろうか、五行志下之下)。趙王の歌に不吉なものを感じたのであろうか、五行志下之下。

の時の腋の傷が悪化して崩じた(五行志中之上)。 の時の腋の傷が悪化して崩じた(五行志中之上)。 がを敢行する。その帰途、「物 倉狗の如きを見、高后の掖をいを敢行する。その帰途、「物 倉狗の如きを見、高后の掖を抱え持ち、あっと言う間に消え去ったのである。これを占ったところ、あっと言う間に消え去ったのである。これを占ったところ、あっと言う間に消えまったのである。これを占ったと思って来る。 の時の腋の傷が悪化して崩じた(五行志中之上)。

> 正と代王恒(後の文帝)のただ二人であった(注四)。 王と代王恒(後の文帝)のただ二人であった(注四)。 王と代王恒(後の文帝)のただ二人であった(注四)。 王と代王恒(後の文帝)のただ二人であった(注四)。 王と代王恒(後の文帝)のただ二人であった(注四)。 王と代王恒(後の文帝)のただ二人であった(注四)。

法令を爲り、漢法を用いず」、「漢の諸侯の人、及び罪有りて度無く、黄屋の蓋を爲り、乘興出入 天子に擬え、擅いままに喚された厲王は、「先帝の法を廢し、天子の詔を聽かず、居處喚された厲王は、「先帝の法を廢し、天子の詔を聽かず、居處數と法を奉ぜず」、平然と「天子に擬う」振る舞いをし、文帝數と法を奉ぜず」、平然と「天子に擬う」振る舞いをし、文帝數と法を奉ぜず」、平然と「天子に擬う」振る舞いをして初いた。「驕蹇にして、の方こそ「最も親」なる身内だとの思いから、「驕蹇にして、の方こそ「最も親」なる身内だとの思いから、「驕蹇にして、

『史記』は「民、歌を作りて淮南厲王を歌ら有り」と言うが、

天下のことで、兄弟二人が助けあえぬとは)

が謳われた。 年のことである。 送される道中、「誰か乃公を勇者と謂わん。吾れ安くんぞ能く 列侯は「法の如くする」ことを結論した。それにもかかわらず、 亡げる者を聚收し、匿いて與に居り」、また、「擅いままに人 ならん」と侍者に語り、「乃ち食らわずして死」んだ。文帝六 る。人生まれて一世の間、安くんぞ能く邑邑として此くの如く 勇ならん。吾れ驕を以ての故に、吾が過を聞かずして此こに至 を誅」したにもかかわらずである。ところが厲王は流刑地に護 り上げ流刑に処すに止めたのである。「盡く謀に與せし所の者 文帝は厲王を断罪するに忍びず、死罪を赦して淮南王の位を取 列侯に下駄を預け、自ら結論することをさしひかえた。果して、 れに対して文帝は、「朕」法を王に致すに忍びず」と、改めて を罪する」などの科で、「當に棄市すべし」と上奏された。そ その後、文帝十二年、民の間に次のような歌

実際は文帝と厲王との異母兄弟を謗ったものと見るべきであろ

兄弟二人、相い容る能わざるとは(それなのにこんな広い に食べることができる)。 衣を縫うことができる)。 一尺の布も、尚お縫う可し(わずか一尺の布でも二人分の 一斗の粟も、尚お舂く可し(わずか一斗の穀でも舂いて共

とすれば、それは肉親の情を捨てて「公」を選ばなかったこと としているかのように言われる。もし、文帝に間違いがあった おうと兄弟、それも呂氏の禍に遭わずに生き残ったたった二人 を企てた時にも何とか死罪を免れさせようと努力した。何と言 はない。むしろ、厲王の数々の無礼も大目に見てきたし、反乱 王には及ぶまいが、さりとて厲王に特別ひどいことをした覚え 公を選んだからであろう。だが、文帝にしてみれば、まさか聖 殺害した古えの聖王が非難されないのは、彼らが私情を捨てて 爲さんや」と嘆いたことからもわかる。実の兄弟を放逐したり を害さざればなり。天下 豈に我れを以て淮南王の地を貪ると 公 管察を殺すも、天下 う。それはこの歌を聞いた文帝が、「堯舜

骨肉を放逐し、周 であろうか。 の兄弟である。それなのに、まるで文帝が厲王の領土を奪おり では、文帝が「私を以て公を害せざる」方法とは何があった 聖と稱す。何となれば、私を以て公

厲王が「天子に擬う」まで驕慢な行為を重ねたのは何に起因す 果的には兄弟相い争ったことにしかならないだろう。 ともできた。あるいは謀反発覚の時点で死刑に処しておくこと もできた。しかし、文帝がそのいずれかを選んだところで、結 食其を殺した時点で処罰しておくこともできたろう。漢の国法 に従わず、自ら天子に擬う行為が目立ち始めた時に手を打つこ か。客観的にはそのチャンスは何度かあった。厲王が辟陽侯審 そもそも

るのか。冷静に判断すれば、文帝が天子になったのは偶然以外の何物でもなかった。呂太后のちょっとした気まぐれで二人の何物でもなかった。呂太后のちょっとした気まぐれで二人のだ、天子になりたくてもなれない者にはそれなりの教育をしてだから、袁盎の言うように、厲王のために厳格な守役や相をつけ、天子になりたくてもなれない者にはそれなりの教育をして育ていまで、袁ےのか。冷静に判断すれば、文帝が天子になったのは偶然以外の思い煩うようなものではなかった。

邪僻の計を挟み、謀りて畔逆を爲し、仍りに父子再び國を亡い、 も、蕃臣の職に遵いて以て天子を承輔するを努めずして、専ら 別の二人を歌うものと考える方が自然である。それは司馬遷が と嘆く理由を厲王・文王の骨肉の争いであると見るが、文帝が るのは不自然である。しかも、事件の後に謳われたのでは「予 各と其の身を終えず、天下の笑いと爲る」と言うところに、そ ていない。従って、この「民歌」は厲王・文帝の二人ではなく、 厲王に極めて寛大かつ同情的であったことから、それは当を得 は、この「民歌」が「兄弟二人、相い容ること能わざるとは 言」の意味がなくなるのだが、これはどういうことか。司馬遷 の記憶から遠のいていたであろう頃に、二人を謗る歌が生まれ それにしても、厲王の死後六年、いいかげん厲王のことも人々 事件の後に謳われているという点で多くの場合と異なっている。 厲王と文帝の二兄弟の争いを謗ったとするこの「民歌」は、 骨肉爲り、 疆土は千里、列して

諸侯と爲る

性を帯びてくることになる。
るものと見ることである。ここに、この「民歌」は一気に予言子供は淮南王安と衡山王賜と、二代にわたって争ったことを謗の謎を解く鍵がある。すなわち、父(厲王)は従兄の文帝と、

文帝十六年、文帝は「淮南厲王、法を廢てて軌わず、自ら國文帝十六年、文帝は「淮南厲王、法を廢てて軌わず、自ら國殺に、淮南・衛山の領地は没収され、それぞれ九江郡と衡山郡として直轄されたのである。

れば當に誰か立つべき者あらん」と謀反を示唆し、田蚡のもく天下に聞こえざる莫し。即し宮車一日晏駕すれば、大王に非ざ天子無し。大王(親しく高皇帝の孫にして、仁義を行うこと、太子無し。大王(親しく高皇帝の孫にして、仁義を行うこと、太子無し。大王(親しく高皇帝の孫にして、仁義を行うこと、太子無し。大王(親しく高皇帝の孫にして、仁義を行うこと、太子無し。大王(親しく高皇帝の孫にして、仁義を行うこと、大子無し。大王(以上のように、この「民歌」は淮南王安と衡山王賜との不仲以上のように、この「民歌」は淮南王安と衡山王賜との不仲以上のように、この「民歌」は淮南王安と衡山王賜との不仲以上のように、

天下 兵 當に大いに起こるべし」と。 だいに起いるべし」と。 だいの進南王も気になった。その時、ある者が淮南王に言った。 たに呉の軍の起こりし時、彗星出づ。長さ數尺なるも、然れ「先に呉の軍の起こりし時、彗星出づ。長さ數尺なるも、然れ「先に呉の軍の起こりし時、彗星出づ。長さ数尺なるのである。「淮南王 心に之れを怪しむ」、されたと記録するのである。「淮南王 心に之れを怪しむ」、されたと記録するのである。「淮南王 心に之れを怪しむ」、されたと記録するのである。

書』淮南王傳)。

『英字の世界のである(以上、『史記』淮南厲王列傳、『漢教」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷歌」の予言する内容の伏線として恐れたことは、先の「民

三、穎川の兒歌について

あるように、父子が共に従軍してどちらかが戦死した場合、喪「父子俱に從軍し、事に死すこと有れば、喪歸に與るを得」と共に呉を攻めたところが、父親が戦死した。当時の軍法では疾夫は景帝から武帝にかけての人。景帝の時、父親の潅孟と

愈々貧賤なれば、尤だ益々敬し、鈞を與う」、「夫れ、文學を愈々貧賤なれば、尤だ益々敬し、鈞を與う」、「夫れ、文學を 癖が悪く、面と向かってのお世辞を嫌った。それはかれが任俠 り剛直にして酒に使い(師古曰く、「使酒」とは酒に因りて気 を聞いた将軍は潅夫を「壯義」として感じ入った。この事で有 止めて、「願はくは呉王、若しくは將軍の頭を取りて、 好まず、任俠を喜み、已ず然諾す」と。 るを欲せず、必ず之れを陵る。諸々の士、己の左に在るもの、 は言う、「貴戚の諸々の有勢、己の右に在るものは、禮を加う の士の一面を持ち合わせていたこととも無関係でない。司馬遷 を使うなり)、面諛を好まず」とあるように、性格は剛直 て官を去る」など、浮沈の多い人生を送った。かれは「人と爲 太后の弟)を殴って左遷されたり、数年後にはまた「法に坐し 去」り、武帝の時には太僕となったものの、これまた寶甫(寶 名になった潅夫を、景帝は中郎将に取り立てたが「法に坐して がよく解ったからもう一度やらせてくれるよう願い出た。これ 死すこと無きを得」た。しかも、傷が少し癒えると、呉の様子 敷十人」、自ら「身中の大創十餘、適々萬金の良薬有り、 の仇に報いんことを」と願い出、呉軍に突進して「殺傷する所 の為に帰国することが許された。しかし、潅夫は帰国するのを 以て父

に民の恨みが生まれたかのごとく、「穎川の兒、之れを歌いてとも言われる。『史記』魏其侯列傳も『漢書』潅夫傳も、ここ百人。陂池田園、宗族資客、權利を爲し、潁川に横いままにす」しかしながら、潅夫は「家 數千萬を累み、食客 日に數十

曰く」と次の歌を載せる。

権氏は皆殺しにされよう)。額水濁れば、潅氏は族せらる(だが潁水が濁った日には、潁水清ければ、潅氏は寒し(潁水が清いうちは潅氏も安泰)。

顧みず人の窮地を救う「游俠」の倫理と行動を称えた。そのか す。而れども其の能を矜らず、其の徳を伐るを羞ず。蓋し亦たず誠あり、其の軀を愛まず、士の阨困に赴き、既已に存亡死牛 る。それは、「諸々の士、己の左に在るもの、愈々貧賤なれば、 恨まれたのが事実であれば、予言が的中したかどうか問題では 夫一族の不幸を予言する歌として記録される。 多とするに足る者有り」(『史記』游俠列傳)と、身の危険を 必ず信、其の行いは必ず果(『論語』子路)。已に諾すれば必 かく(注六)、司馬遷は「游俠」を高く評価する。「其の言は まれるようなことになったのかという疑問である。 尤だ益々敬し、鈞を與う」と言われた潅夫、教養はなかったが であったろうから。ところが、ここに大きな疑問が残るのであ **うと当たるまいと、潅氏が「族せらる」ことは民の切なる願望** するまでもなく、予言しようとしまいと、また、予言が当たろ ない。顔師古が「深く之れを怨嫉す。故に此の言を爲す」と注 権夫への恨みを吐露するかのようなこの歌は、
 「任俠を好み、已ず然諾す」と言われた潅夫が、なぜ民から恨 もし潅夫が民に 『史記』では潅 班固はとも

> を言うのと隔たりがありすぎる。 潅夫を「術無くして不遜」とも評するが、先の潅夫の任俠気質れが潅夫をただの悪人にしてしまうのは不可解である。確かに

人物を非難しているのである。歌は潅夫に警告を発するための歌であり、潅夫に借りて、他のると、非常に興味深い発見がある。結論を先取りすれば、このそこで、様々な角度からこの「兒歌」の裏の意味を探ってみ

歌の意味も一層深まるが。

歌の意味も一層深まるが。

歌の意味も一層深まるが。

歌の意味も一層深まるが。

歌の意味も一層深まるが。

いつ葬られるかわからない」と。潁水の清濁を外戚の浮沈にたものである。すなわち、「潅夫よ、回りの人間に気をつけろ。に、外戚の勢力争いに巻き込まれないよう警告した歌だと見るまた別の見方は、「任俠を喜み、已ず然諾す」る一途な潅夫

あるいはまた、外戚に利用されて「純真な潅夫がこの

濁となる。 皆殺しの目に遭りだろう」と。穎水の清濁は潅夫自身の心の清 まま野心を抱かなければ安泰。だが、下手に野心を抱くと一族

宴席では田蚡に敵意を剝き出しにした。また、田蚡が魏其侯の 揮される。潅夫はそんな冗談を認めず強引に田蚡を連れて行き、 たが一向に現れない。潅夫が迎えに行ってみると田蚡はまだ寝 これまた勢力を失い食客が逃げて行って取り残された潅夫とは みに隠されている。資太后を失って権勢の衰え始めた魏其侯と、 帝の皇后にして武帝の母王氏の同母弟)という二人の外戚が巧 皇后にして景帝の母寶氏の従兄の子)、それに武安侯田蚡 への反撃を開始するのである。 を笠に着た横暴な要求だとしてはねつけた。ここに田蚡は潅夫 田地を求めた時には、魏其侯も潅夫も、それを田蚡が外戚王氏 ており、あれは冗談だと言う。ここから任俠者権夫の本領が発 を訪問すると口にした。魏其侯も潅夫もそのつもりで待ってい 父子の如く交際した。そんな時、たまたま丞相の田蚡が魏其侯 だが、いずれにせよこの歌には、潅夫と魏其侯寶嬰(文帝の (景

よく失敗するので」と断る潅夫を無理やり連れて行き、宴席で 請わん」と一蹴した。次は田蚡の婚礼の祝宴の時。「酒の上で 書したことである。ところが、武帝は「此れ丞相の事、何をか と甚だし。民 之れに苦しむ」、よくよく調査されたし、 まずは手初めに、「潅夫の家、潁川に在りしとき、横なるこ と上

自ら流した天子誹謗の数々を、魏其侯が言ったとして天子の耳 打ちをかけるように、「蜚語有り、惡言を爲して上に聞す」、 む」、権夫とその一族に死刑の判決が下った。更に田蚡は追い

魏其侯を侮辱し、それに腹を立てて罵った潅夫を不敬罪で弾劾 し拘禁したのである。

弾劾、 甲斐なく「(元光)五年十月(注七)、悉く潅夫及び家屬を論 川に横恣し、宗室を凌轢す」に引きずられているのではないだ 宗族賓客、權利を爲し、潁川に橫いままにす」という司馬遷のの所業、「家」數千萬を累み、食客、日に數十百人。陂池田園、 また潅夫を救おうう奔走したが、逆に自身も告発され、努力の て一途な潅夫は、その罠に落ちたのである。そして、魏其侯も 潅夫が何かしでかせば巻き返しの絶好のチャンスとなる。果し ば潅夫が何かしでかすことを田蚡は計算して諮ったものに見え **潅夫を利用したのではないか。潅夫を抹殺することは、潅夫を** するために、寳嬰と特に親しく、しかも任俠心ゆえに反抗的な ろうか。武安侯田蚡は、魏其侯竇嬰を抹殺して外戚寶氏を撲滅 記録は、この後の武安侯田蚡による魏其侯追い落としのための る。武帝にも軽くあしらわれ無視された形となった潅夫弾劾も、 充分予測できたこと、否、公衆の面前で魏其侯に恥をかかせれ そのように考えると、田蚡の祝宴で潅夫がしたことは田蚡には 弁護し続けた寳嬰を引きずり降ろすことにもなるからである。 ところで、この「兒歌」が生まれた原因とする潁川での潅

て死刑ができなくなっては困るから、否、それ以上に立春の特 武帝が「魏其を殺すに意無し」であったこと、また、春になっ され」たが、田蚡が寳嬰の処刑をこれほどまでに急いだのは、 に入れた。ついに魏其侯は「十二月晦を以て論めて渭城に弃市

が、「兩人相い翼けて、乃ち禍亂を成し」たにほかならないと 実は司馬遷も、「衆庶、載んぜず、竟に惡言を被る」ような赦で竇嬰が処刑を免れるのを恐れたからにほかならない。 ると言えよう。それ故、先の趙の叢台の火災によって趙王に身 望するかのように見せながら、その実は、その元凶である武安 この歌を潅夫をなじるものとは理解し難い。司馬遷のこの論評 見ており、また、「武安」貴を負んで權を好み、杯酒に責望し、 結果を生んだことを、かれ一人に原因があるとは見ていない。 の禍を知らせようとした歌であると考えてもよい。更に興味深 の危険を知らせようとしたように、この「兒歌」は潅夫に外戚 侯田蚡を、ひいては外戚そのものを非難攻撃しているものであ している。そして、表面上は潅夫を攻撃し潅氏一族皆殺しを切 は、この「兒歌」が直接に潅氏を誇ったものでないことを暗示 夫の優れた人物を陥れたのだと言う。そうであればなおさら、 彼の兩賢を陷る」と、田蚡がその飽くなき権力欲から竇嬰・潅 「誠に時變を知らざる」魏其侯と「術無くして不遜」の潅夫と 権夫と寶嬰が処刑された後、田蚡は病気になって

見立てによると、それは寳嬰と潅夫とがかれを殺そうとしてる

「專ら呼服謝罪す」、自分が悪かったとうわごとに言い、巫の

いことには、

安を直しとせず、特だ太后の爲の故のみ」、「武安侯をして在 てしかるべき、まるでそう言うかのようである。 をと結んでいるのは、この「兒歌」に謳われた潅氏は田蚡であっ けのこと、武安侯が生きていたら一族皆殺しにしてやったもの ら使めば族せん」、武帝は王太后のために目をつぶっていただ は言わないが、司馬遷が田蚡のことを、 からであったという。この「兒歌」がそこまで予言していたと . 二 上 魏其の時自り武

四、 王太后をめぐって

女を舞わしめて倡優を作し、狗馬馳逐する」ような私生活、そ姫妾、各々數十人、僮奴、千百を以て數え、鐘・磬を羅ね、鄭 の住まいと言えば「大いに第室を治め、 とした。かれら五人は同日にして諸侯に封ぜられたので、 平阿侯、商を成都侯、立を紅陽侯、根を曲陽侯、逢時を高平侯 王皇后は皇太后として君臨し、太后の兄弟、王鳳の異母弟譚を を継がせた。そして元帝が崩じて太子(成帝)が即位するや、 王禁の弟王弘を長楽衛尉、王禁が死ぬと皇后の弟王鳳に陽平侯 四方から珍宝や賄賂をかき集め、財力にもの言わせて「後庭の ではこれを「五侯」と呼んだ。「五侯」は権力にもの言わせて 元帝が即位すると、皇后は父王禁を陽平侯に封じ、三日後には 司馬となった者は五人、外戚としてこれほど盛んなものはない。 十一代皇帝元帝の皇后王氏。王家で侯となった者は十人、大 土山漸臺を起こし、 世間

門高廊閣道、 奢侈を競っていた。そんな時に「百姓」が歌ったのが次の歌で 連屬して彌望す」るような大邸宅で、遊興に耽り

西の白虎に象る(注八) 外杜に連竟す。 曲陽 上山 嘶臺 高都を壊決して、 最も怒ぶる。

初めて起こり、

を穿ち、灃水を引内し、第中の大陂に注ぎて以て船を行らせ」、 王根を謳うとも解し得る(『漢書』元后傳)。それとも、権勢 白虎殿に似類す」るのを見、怒り心頭に達したとあることから、 二句は、後に曲陽侯の邸宅を訪れた成帝が「園中の土山凘臺、 ず」、何とか怒りをこらえたとあるからである。また、最後の 成帝自身もそれを見て「意に恨み、内に之れを銜み、未だ言わ 王商を謳っていると見ることも可能である。成都侯は「長安城 根の邸宅を言うものと理解できる。あるいは、中二句を成都侯 水を引き、その築山と台とはまるで天子の白虎殿のよう」も干 四句の「高都水(長安の西にある)の支流を作って外都里まで 侯の勢いが最も盛ん」と曲陽侯王根を名指しで謳う。同様に後 前二句は「この世に初めて『五侯』が現れた。その中でも曲陽

> らこの歌は成帝が即位した建始元年に起きた予兆と無縁でない この歌を「五侯」を称えるものだと信じる者はいない。なぜな の勢いの良さ、羽振りの良さ、邸宅の素晴らしさを謳うのだが、 謗るものであろうか。ともあれ、表面的にはあくまで「五侯」 を好む人間は互いに競い合い、その欲望は際限がないと両者を からである。

壬寅、晨、大風西北從り起こり、雲氣赤黄たりて、天下に成帝建始元年四月辛丑、夜、西北に火光の如きもの有り。 四塞す。日夜を終えて下りて地に著く者は黄土塵なり (『漢書』五行志・下之上)。

は、 ば「嗣あらず」という最悪の事態を招くことを言うものである 知り、推して之れを貢むべき」を知らず、その非を改めなけれ ことを意味している。すなわち、「當に賢人を觀て其の性行を その日の出来事で、かれらの爵位や封土が分を越えているとの 天下に四塞すること有り」に生じ、それは「賢を磁い道を絶つ」 天の戒めであり、災いの兆しである。そもそも「黄」の現象と に覆われるという不吉に見舞われた。これは「五侯」を封じた 成帝は即位して間もなく赤黄色の雲が現れ、一夜にして黄土塵 同上に引く『京房易傳』)。果して成帝には子供が育たなかっ (注九)。 「日の上 黄光し、散ぜずして火の如く然り。黄濁の氣

は 王朝を簒奪した王莽の出現をも予言していたことになる。それ の黄巾の乱を容易に連想させる)、王太后の甥であり、後に漢 の漢王朝に代わる土徳(黄)の出現を暗示するもので(後漢末 の歌は、「黄土塵」に覆われる異常現象とともに、火徳(赤) という、人間の欲望の際限のなさをも嘆くが如きこの「五侯」 とたび権力を握った者は他の者より上でなければ満足できない 恨み、皇太后にいいように操られているふがいない成帝を罵り 謳うかのようでいて「五侯」を呪い、王太后並びに外戚王氏を が見え隠れしている。一見「五侯」の優雅な生活ぶりを淡々と 者の恨み、更には王太后の専横を謗り外戚の横暴を糾弾する声 盗を爲し」ても見逃されているという事実、その実害を被った るだけでなく、かれらの匿った「姦猾・亡命」者や賓客が「墓 青瑣」という天子の制を用いる「五侯」の僭越ぶりを謳うこと それゆえ、この歌は天子の白虎殿を模した邸宅に住み、「赤墀 は確かである。しかし、これは「五侯」の奢侈や僭上を非難す (注十)、政治そのものに対する不信を爆発させる。また、ひ このように、「五侯」はその出現の時点で異常視されていた。 次に挙げる謠にも通ずるところである。

ている)。 張公子 時に相い見る(張公子はいつも一緒にその燕を見 燕よ燕、尾は涎涎たり(燕よ燕、尾がつやつや輝いている)。

木門倉琅の根

(宮殿の門鐶の根っこの所に)、

皇孫死して、燕(矢を啄む(その皇孫が死んだ後、燕は矢燕(飛來して、皇孫を啄む(燕がやって来て皇孫を啄む)。

を啄む)。

「五行志・中之上」は、この「童謠」を「其の後、帝 微行を爲して出遊するに、常に富平侯張放と俱にし、富平侯の家人を爲して出遊するに、常に富平侯張放と俱にし、富平侯の家人を稱して、陽阿主を過りて樂を作し、舞者趙飛燕を見て之れをを啄む』なり」と、趙皇后姉妹のことを予言するものと解説している。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とを啄む』なり」と、趙皇后姉妹のことを予言するものと解説している。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とている。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述とない。

す。(永始元年)夏四月、婕妤趙氏の父臨を封じて成陽侯と爲(永始元年)夏四月、婕妤趙氏の父臨を封じて成陽侯と爲(鴻嘉三年)冬十一月、甲寅、皇后許氏 廢せらる。

と爲す。 五月、舅曼の子、侍中騎都尉光禄大夫王莽を封じて新都侯

六月、丙寅、皇后趙氏を立つ。

是の歳(元延元年)、昭儀趙氏、後宮の皇子を害す。

侯」の歌と同様、成帝に後継者ができないことの予言であり、 とは次のようである。 人々は漢王朝の終わりを予測していたと言える。その「謌謠 の威福の由來する所の者、漸あり」(成帝紀、贊)と、すでに 國令を執り、哀・平 の出現を予言する歌と解してよい。「建始以來、王氏 更にはこの「童謠」のすぐ後に掲げる「謌謠」とともに、王莽 とだけにとどまらない。すなわち、先の「百姓」の謳った「五 するのであろう。しかしながら、実はこの予言は趙氏姉妹のこ 子を殺し、あげくのはてに処刑されたのである。 姉は皇后の座を、妹は昭儀の座を手に入れ、妹の燕は後宮の皇 姉妹にすっかりいれあげ、姉妹共に成帝の寵愛を受け、 「燕燕」と繰り返すことで趙氏の姉妹を暗示しているのであろ 「趙氏」こそ、 「昭儀趙氏」こそ趙飛燕の妹である。成帝が踊り子「燕 「燕、矢を啄む」と結ぶことで趙氏の悲惨な最後を予言 「童謠」で謳われた「燕」こと趙飛燕であ 短祚にして、莽 遂に位を篡う。蓋し其 「童謠」は 始めて ついに

黄爵(其の頗に巣くう(黄色い雀が桂の木のてっぺんに巣桂樹(華あるも實らず(桂は花開けども実らず)、認口(善人を亂す(讒言は善人をだめにする)。

人の憐れむ所と爲る(今では人から哀れまれ)。人の羨む所と爲り(昔は人から羨まれたが)、

取ったのであっても。 たのである。それが結果的に「其の顔に巢く」って漢王朝を乗っ り果てた「五侯」でもない。人々はここに王莽の出現を予言し とではない。「孝元后 るも實らざる」成帝でもなければ、今や「人の憐れむ所と爲」 からず一網打尽に遭うだろう。それをやってのけるのは「華あ かつては奢侈を誇った「五侯」も、すでに翳りが見え始め、遠 し」た外戚王氏の「邪徑」は、漢王朝の「良田」を損なった。 國を饗けること六十餘載、羣弟 権を世々にし、更々國柄を持 と、これを王莽が漢王朝を簒奪する予言だとしている。この きなり。王莽 自ら黄象と謂い、黄爵 赤色にして、漢家の象なり。 「謌謠」に王莽の出現を予言するとするのは必ずしも意外なこ ここにも不吉な予言が隠されている。 漢を歴ること四世、天下の母と爲り、 『華あるも實らず』とは、繼嗣無 其の顚に巢くうなり」 『漢書』は「『桂』は

て侈靡し、興馬聲色佚游を以て相い高ぶる」従兄弟たちの中で、に列せられなかった。「皆な將軍・五侯の子にして、時に乗じんだにもかかわらず、王莽の父王曼は若くして死んだために侯かれはそれほどの悪人ではなかった。王氏は「五將十侯」を生かれはそれほどの悪人ではなかった。王氏は「五將十侯」を生いったい、王莽は漢王朝から王位を篡奪した悪人として定着

王莽は「獨り孤貧」であった。そのかれは、

「因りて節を折り

出現を忌むものではない。元帝以来四代、六十年にわたって権 は新都侯となった後も質素な生活を続け、領国の吏民からも信 方であったのかも知れない。その後の王莽は人情の機徴を逸速 ろうが、 の予言は外戚王氏の殲滅と王莽の新時代を期待する歌となる。 新しい世の中を期待したのではないか。もしそうであれば、 王朝に人々が期待するものは何であったろうか。人々は王莽に 存在は、人々にとって非難の対象でしかなかった。このような 勢をほしいままにしてきた王氏、その頂点にあった「五侯」の く、この事実だけに注目するなら、この予言は必ずしも王莽の 類を得ていたという (王莽傳上)。今、その後の王莽にではな 王莽には「五侯」のような傲慢な態度はなかった。事実、王莽 く祭知する能力を身につけていったようであるが、少なくとも、 薬を嘗め、亂首垢面、衣帶を解かずして月を連」ね、これをきっ ることもできる。世父大將軍王鳳の病床を見舞った時、「親ら たという。もちろん、これを王莽の計算し尽くした芝居だと見 くし、寡婦となった嫂や兄の遺児を養うという人となりであっ を養い、行い甚だ敕備なり」と、生活は質素で、母には孝を尽 學を博め、被服は儒生の如くし、母及び寡嫂に事え、孤の兄子 かけに世に出たのであるから、あるいはこれが孤児王莽の生き て恭儉を爲し、禮經を受け、沛郡の陳參に師事して、 これらの「謠」が諸悪の根源王氏を管理できない成帝 其の顚に巢くう」の一句に囚われるなら穿ち過ぎとな 身を勤め

である。することは許されよう。また、次の「童謠」も成帝を謗るものすることは許されよう。また、次の「童謠」も成帝を謗るものの罪を糾弾し、残酷にも成帝の死を待ち望むものであると理解

消してしまう)。 井水 溢れて、竈煙を滅ぼす(井戸水が溢れて竈の煙りを

美しい門を流し去る)。 玉堂に潅ぎ、金門を流す(その水は美しい宮殿に流れ込み、

の時代の「童謠」に予見されていたとするのである。 二年)三月、北宮の井水 溢出す」とあり、これがすでに元帝起こった出来事を予見する歌とされている。成帝紀に「(建始日主」であるが、何と成帝が即位した二年目(建始二年)におよそ縁起が良いと言えないこの歌は、元帝の世に流行したおよそ縁起が良いと言えないこの歌は、元帝の世に流行した

三公と爲りて政を輔け、因りて以て位を篡う。莽、元帝の初元四年に生まれ、成帝に至って侯に封ぜられ、陰盛んにして陽を滅ぼすに象り、竊かに宮室の應有り。王井水は陰なり。篚煙は陽なり。玉堂・金門は至尊の居なり。

うのである。しかも、歴史事実がその予兆を裏付ける。『春秋ぬ(あるいは王朝が転覆する)ことの予兆にほかならないとい陰気が陽気を滅ぼすとは宮殿が滅びること、すなわち天子が死

昭公の時に至りて、鸜鵒有り來りて巢くう。公 季氏を攻

左氏傳』昭公二十五年に次のような「童謠」が見える。

国を出て恥をかく)。 鸜や鴿や、公 出でて唇めらる(ははっちょうよ、殿様は

殿様は国外の田舎にいる)。 鸛鷂の羽、公 外野に在り(ははっちょうが羽ばたいて、

贈り、ははっちょうは跳ね回る)。往きて之れに馬を饋り、鸜鵒 跦跦たり(使いの者が馬を

と下着を求める)。 乾侯に在り、褰と襦とを徴む(殿様は乾侯にいて、袴

うが巣を作り、殿様は不安がる)。 鸛鴿の巢くい、遠きかな遙遙(注十一)たり(ははっちょ

父は驕る)。 概父 喪勞し、宋父 以て驕る (稠父は苦労して死に、宋

ちょう、殿様がでかける時は歌い、帰る時は泣き叫ぶ)。鸜鵒鸜鵒、往くに歌い來るに哭す(ははっちょうよ、ははっ

の名なのである。
ここに出て来る「禂父」とは昭公の名、「宋父」とは次の定公いう。それが何と数十年後の昭公の代になって現実となった。いう。

立つ。是れ定公爲り(五行志・中之上)。して外に死し、歸りて魯に葬らる。昭公(名は禂。公子忠め、敗れて齊に出奔し、外野に居り、乾侯に次る。八年にめ、敗れて齊に出奔し、外野に居り、乾侯に次る。八年に

の「童謠」が早くも成帝の終わりを告げていたとすること、す歌とも考えられる。しかし、今ここで注目すべきは、元帝の時可能である。あるいは古い「童謠」に時の人物を織り込んだ替という固有名詞まで読み込む歌ができるなど、常識で考えて不昭公の生まれるはるか数十年も前に、「乾侯」「裯」「宋」

なわち、先帝の世に歌われた「童謠」の内容が、「成帝の建始

二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」

おわりに

さと相い俟って、謳う者に安心感と解放感を与える。なぜなら、のいずれを借りようと、どれも誰が謳ったかわからないことでのいずれを借りようと、どれも誰が謳ったかわからないことでのいずれを借りようと、また、「童」「兒」「民」「百姓」のいずれを問された毒気があり、それぞれに付加されるは、いずれにも隠された毒気があり、それぞれに付加されるいで百姓歌」といい、あるいは「民歌」といく、「童謠」といい「兒歌」といい、あるいは「民歌」とい

であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないが諦めることもない。だから緊張感がであった。危険は冒さないが諦めることもない。だから緊張感がであった。危険は冒さないが高されば高まるほど、危機が迫れば迫るほど、不平不満を巧みに隠し、どのようにでも解釈できる可能性を持たせて逃げ道をに隠し、どのようにでも解釈できる可能性を持たせて逃げ道をなような無駄な死を選ばなかったように、司馬遷が恥辱に耐えるような無駄な死を選ばなかったように、軽々しくは死なない生活者の知恵であり方法であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、であった。危険は冒さないがいが、不平不満を爆発させるければあるほであった。危険は冒さないがいからない無力な人々が、ともかくも生き続けることをしない無力な人々が、ともかくも生き続けることになるから、だからないがあるに、一つないがいからないが、一つないが、ためいは、これが、これが、一つないが、一つないが、一つないが、一つないが、一つないといいが、であるいが、一つないはいいが、一つないがはないが、一つないないが、一つないが、一つないないが、一つないないが、一つないないないがいがいがいいいいいいいいいないないないがいないないないないがいないないないないないないないない

その傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけるの位向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたのない、古代中国人の反逆の精神の賜物であると考えている。ないらこそ為政者も無視できなかったのである。概して為政者だからこそ為政者も無視できなかったのである。概して為政者だからこそ為政者も無視できなかったのである。概して為政者が、はこのような歌・謠を軽視する(あるいは軽視したがる)が、はこのような歌・謠を軽視する(あるいは軽視したがる)が、はこのような歌・謠を軽視する(あるいは軽視したがる)が、はこのような歌・謠を軽視する(あるいは軽視したがる)が、はこのような歌・謠を軽視する、あるいとを知る人々は、まからかい馬鹿にし、時には愚弄し、そして、後漢から六朝にかけたの傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたの傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたの傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたの傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたの傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたの傾向は「童」に託した「謠」として、後漢から六朝にかけたのであった。

う「謠」に用いられる。

清の杜文瀾『古謠諺』は歴代の「歌」「謠」

「諺」を輯

なろう。

注 らの期待が裏切られることなく願いが叶い、恨みの相手が悲惨 それが特定の個人の抹殺を意味しようとも、王朝の転覆を意味 るところもその実は人々の切なる願いであり、将来への期待― な最後を遂げれば、その最後が悲惨であればあるほど、その しようとも―を代弁したものであったと言える。そして、かれ いずれも当時の人々の恨みを吐露するものであり、その予言す しかし、『史記』・『漢書』に記録された「歌」や「謠」は、 てより一層顕著となるのである。 「謠」は予言的効果を発揮することになるのである。 本稿で取り上げた「歌」や「謠」は前漢のすべてではない。

注五

注二 古代漢語では、後世、拆字・測字、あるいは離合と呼ば 十日ト=董卓、鳳=凡鳥=凡人など)、これも暴虐者を呪 れる言葉遊びがあり(卯金刀=劉、牛+一=生、千里草・ 点から後漢以降の拆字と識との関係に触れている。 中で「Ⅳ 不可知なものを探る」は、主として言語学の観 など、世界の言語の言葉遊びを例を挙げて解説する。その 日本語、インド、ビルマ、アフリカの諸言語、モンゴル語 館書店)はギリシャ・ローマ、上海語、満州語、朝鮮語、 江口一久編『ことば遊びの民族誌』(一九九〇年、大修

> 注四 もう一人、曹夫人との間に生まれた斉王肥がいたが、か 文学概論』(一九四六年、世界書局)は「謠」の修辞的特 の王子として無事であったのは二人だけであった。 れは恵帝在位中に病死しているから、呂太后の時代に高祖 創文社)が「謠」の文学性について簡単に触れている。 色に触れ、本邦では狩野直喜『兩漢學術考』(一九六四年、 めたもので、工具書としての価値は高い。楊蔭深『中国俗 筑摩書房)・増田清秀『樂府の歴史的研究』(一九七五年) 武安侯田蚡については、本論「三」に詳しい。

注七 卯、丞相蚡 薨ず」と言うことから、おそらく潅夫及びそ 年、冬、魏其侯寶嬰 罪有り、棄市せらる。春、三月、 卒したことになっており、『漢書』武帝紀も「(元光) み、其の罪 已に誅を容さず」と、「游俠」を社会秩序を 総じて言えばやはり「匹夫の細なるを以て、殺生の權を竊 てたが、「其の温良泛愛にして、窮を振い急を周い、謙退 寶嬰が処刑され、 の一族が裁かれたのは四年十月、その年の十二月に魏其侯 乱す張本人とみなして司馬遷とは異なった価値判断を下す。 して伐らざるを觀れば、亦た皆な絶異の姿有り」とはいえ、 班固は『史記』以後の俠客をも追加して「游俠傳」を立 『史記』漢興以來將相名臣年表では、田蚡は元光四年に 同四年三月に武安侯田蚡が悶死したこと

に従って改めた。 潘安仁「西征賦」李善注に「象西白虎」とあるので、それ四百六十五に「象西白武(原注、白虎殿の名)」、『文選』

「園中土山漸臺似類白虎殿」とあり、また『太平御覽』巻

遂に子供ができなかった。
遂に子供ができなかった。
遂に子供ができなかった。
遂に子供ができなかった。
遊に上まれたが子供は趙昭儀に殺された。それ、曹宮との間に生まれたが子供は趙昭儀に殺された。その上、西宮との間に生まれたが子供は趙昭儀に殺された。その上、武帝の龍愛を十数年ほしいままにした趙氏姉妹には、

「搖搖」で解釈した。 注十一 『漢書』は「搖搖」に作る。不安のさまをいう。今、

を説明している。その七律とは「東風拂面催桃李/鶲鷹舒翅展が、作者朱海洪氏のロサンゼルスでの談話を掲載し、事の経緯た。そして四月二日、今後はシンガポールの新聞『聯合早報』題する七律が掲載され、日本でも数日後に新聞紙上で紹介され風記』 三月二十日付『人民日報』(海外版)に「元宵」と

「鵬程」は大いなる民主化を隠しており、「一九八九年春、自「鵬程」は大いなる民主化を隠しており、「一九八九年春、自「鵬程」は大いなる民主化を隠しており、「一九八九年春、自「鵬程」は大いなる民主化を隠しており、「一九八九年春、自「鵬程」は大いなる民主化を窓しており、「一九八九年春、自「鵬程」は大いなる民主化を隠しており、「一九八九年春、自